

# ザ・ジャーナル!!

Vol.3 No.4  
冬号

“やさしさ便り～岡山医療センターの今”

URL <http://www.hosp.go.jp/~okayama/> E-mail [info@okayama3.hosp.go.jp](mailto:info@okayama3.hosp.go.jp)

## CONTENTS

This is our hospital ●年頭のごあいさつ ——— 2

●センターTOPICS ——— 3

ジャスト ナウ ● 当院のビタミン **事務部特集** ——— 4～5

シリーズ ● 岡山医療センター物語 第12話「がんを体験して」 ——— 6

●私の趣味 ——— 6

●ウィーン大学医学部訪問記 ——— 7

●病院活動案内 ——— 8

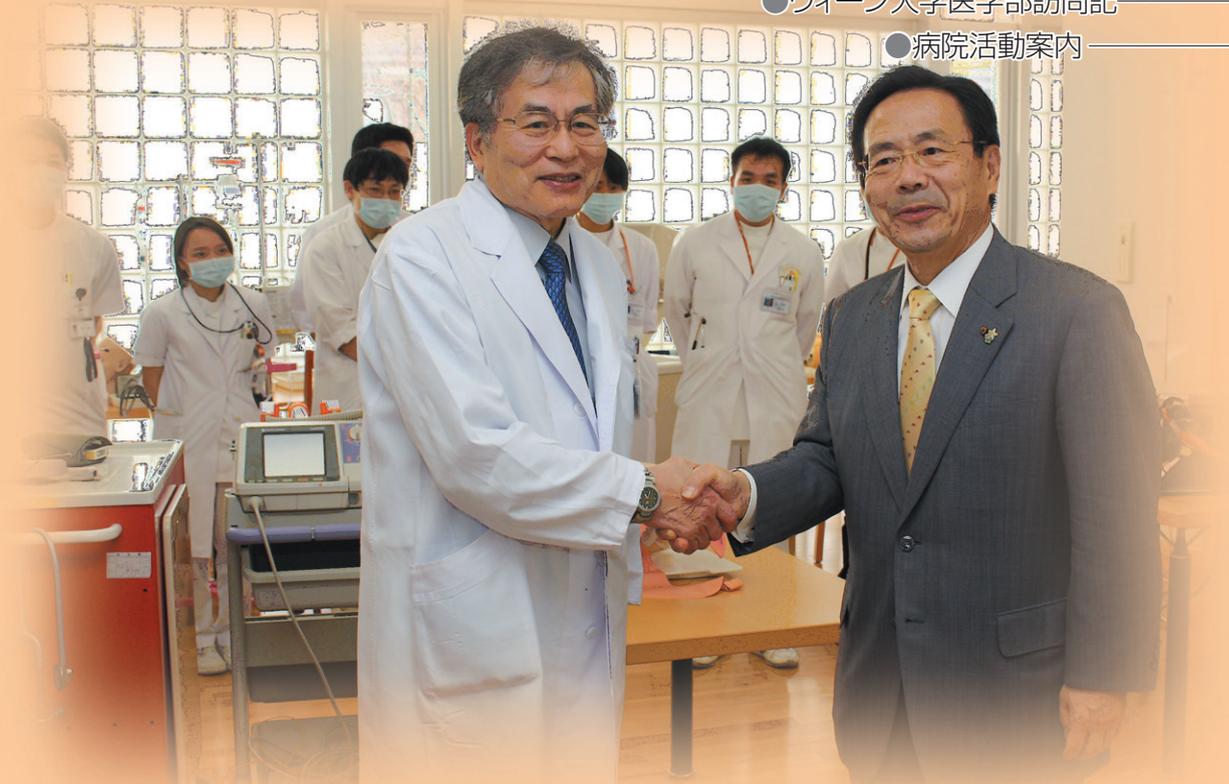


写真 | 県知事 周産期医療視察 (2009.1.27)

### 地域医療支援病院・がん診療連携拠点病院

#### 岡山医療センターの理念

一人にやさしい病院— をめざして

—Human Friendly Hospital—

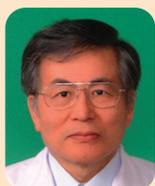


- 1: 患者さまにやさしい病院を目指します
- 2: 病院で働く人にやさしい病院を目指します
- 3: 地域の人にやさしい病院を目指します

## センター/TOPICS



### 年頭のごあいさつ 院長 青山 興司



明けましておめでとうございます。昨年は本院にとって大変喜ばしい事が有りました。私が赴任以来最も重視していた一つである‘研修医に人気のある病院になる’が実現した事です。本院の初期研修医は定員

15名ですが、これに対し第1希望者が29名もあった事です。東京近辺の大病院には及びませんが、全国で17位、中国四国地方ではトップの希望者数です。これは、研修医の教育に力を入れて来た本院の方向性が多くの若い医師に支持された結果であると素直に喜んでおります。

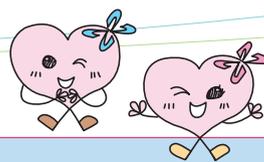
今、世界に目を向けてみますと、サブプライム問題に端を発して、リーマンブラザーズの破綻が大きな引き金となり、世界的な不況に突入しています。その中で、北海道程度の面積で人口31万人の小さな国のアイスランドは1990年代後半から、金融立国として歩み始め、2006年には国民一人あたりの総収入(GDI)が、先進国でも非常に高い水準になり、一時はすばらしい国と持てはやされました。しかしこの金融危機で一気に世界初の破産寸前の状態に追い込まれています。これは金融至上主義の招いた結果と言わざるを得ません。一方、北欧のフィンランドは日本とほぼ同じ面積の国ですが、人口は500万人と非常に少なく、国の方針として“教育”を重視し、GNPの5.8%(日本は3.5%)を教育費に当てています。その結果、多くの有能なフィンランド人がヨーロッパ各地で活躍しており、貿易立国としての地位を確実にしています。

このことから考えてみても、教育は国にとって非常に重要なものであり、我が国においてもフィンランドと同様に、まずしっかりとした“教育”を行い、世界に誇れる日本独自の産業を培い、貿易立国として生き残る必要があります。医療界も同様に目先の利益に振り回される事なく、しっかりとした見識と信念を持って揺るぎのない将来像を目指して進むべき時代だと思います。

そのような中で、我が国の医療に目を向けると、医療崩壊、医療危機という言葉がマスコミで大きく取り上げられ、臨床研修医制度の見直し、医学部定員増

加など短期的視野に立った制度改革が進んでいるように思います。臨床研修医制度については、新制度が始まって僅か5年しか経ってなく、本院を含め多くの病院は、この制度の中でのより良い教育・研修を求めて努力邁進中である現在において、‘否’として制度を安易に変更する時期ではないと思います。また、医療崩壊という言葉についても、実際に患者さんにとって、10年前と比較して本当に医療は悪くなったのかと考えてみると、必ずしもそうとは言えず、むしろ良くなった部分が多くあると思えます。例えば、10年前、我々の病院も含めて多くの医療機関では、患者さんの具合が悪い場合、検査、手術の予定も決めず、まず入院させ、その後の検査は医師の都合に合わせて行われるのが常でありました。何時結果が分かり、何時手術が行われるかも分からず、長い入院を余儀なくされる事も度々あったと思われます。しかし、現在では、ほとんどの患者さんは入院前に検査結果、入院期間、手術計画の詳細な説明を受け、納得してその計画に沿った入院加療を受けています。入院日数も大幅に短縮されております。これらは患者さんにとって、高いQOLになっております。ただ、昔のように同一病院に長期の入院を希望する人にとっては、早期の退院を余儀なくされるといった負の一面が有ることは否定出来ません。更に、病院の機能分化が一段と進み、重症を扱う急性期病院には、多くの看護師の配置がなされ、手厚い看護が可能となっております。我々の病院においても、5年前に比べて同じ病床数でありながら、看護師数はほぼ倍増しており、患者さんの重症度にあつた看護が出来るようになっております。

以上、医療の現状を考えて見て、いくらか負の面は有るにしても、以前に比べ良くなっている事が多くあると思います。一時的な風潮や偏ったマスコミの報道に“揺さぶられる”ことなく、事の良否を見極める力を持つことが重要である事を認識し、その土台づくりである教育、研修に重点を置き、本院の理念である‘人にやさしい病院を目指して’頑張っていきたいと思っておりますので、よろしく願いいたします。



岡山医療センター附属岡山看護学校の二人の学生が、外出中に交通事故の現場に遭遇しました。自分達でできることを一生懸命に行い、「看護を学ぶ人」として多くの気づきや学びがあったことを記述しました。

## 看護学生のお手柄

### ～救急の役割を知る～ 看護学校 第2学年 松野 早余子

外出中、交通事故の現場を目撃しました。私は救急隊員のかたが現場に到着されるまでの間に、一時的処置にあたりました。被害者の意識状態、口腔内の多量出血による窒息の予防、脈拍・チアノーゼの確認をおこないました。私は被害者に声をかけながら急変しないことを願い、隊員到着後は観察項目を報告しました。その後も、隊員の指示にそって外傷の有無や身元確認、現場周辺の清掃をおこないました。今回の経験から、救急処置の流れを知り、いかに冷静に物事を判断し、順序をおって早急に状態の観察を行い、患者を搬送できるかが、救急の役割であると実際に身をもって知ることができました。



### ～緊急時の精神的サポートの必要性を知る～ 看護学校 第2学年 市場 美沙

友人と買い物に行く途中、倒れている人を発見しました。近くにいた方に「看護学生です。救急車は呼びましたか」と声をかけ、負傷者に近寄りました。救助者の中に加害者の方もおり、動揺して過呼吸になりそうな状況であったため、「大丈夫です。安心してください、深呼吸をして落ち着きましょう」など声をかけながら水分摂取を促しました。声かけや表情、手を使い寄り添うことでその人の精神状態が少しわかるような気がして、緊急事態の対応に精神的サポートは大切だと思いました。このような場面に遭遇した時のために、観察能力、アセスメント能力、技術を備えておく必要があると学びました。

この事故の時に現場で  
救命活動をされた救急救命士の方からの温かいメッセージ



看護師さんかと思ったら看護学生と知り、驚きました。これから看護師を目指していると聞き、とても頼もしいと思いました。とても助かりました。ありがとうございました。

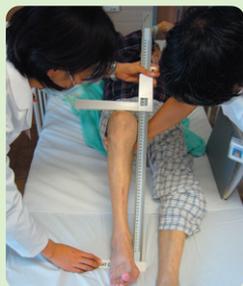
## どんどん進化します!病院食と栄養活動。

栄養管理室 植田 麻子

病院食と言えば『早い・まずい・冷たい』と言われていましたが、温かい料理は温かく・冷たいものは冷たく、夕食は6時以降に提供することは、当院では今や当たり前のこととなっています。また、平成14年より「選択(複数)メニュー」を導入し「選ぶことができる」という満足感を味わって頂きながら、バラエティに富んだ食事を提供し好評を得ています。病院食としてはあまりお目にかからない食材を用い、松花堂弁当とイタリアンの二種類の「特別メニュー」を用意。四季折々の食材を使い、食器の一つ一つ、ナイフやフォークにもこだわりながら調理・盛り付けをし、レストラン・料亭さながらの雰囲気



松花堂弁当  
1月の特別メニュー(松花堂弁当)です。お刺身、小ぶぐの唐揚げ、白和え、菜めし、果物など季節の食材でお届けします。飲み物も選んでいただけます。



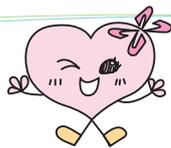
身体計測  
NST回診で患者様の栄養状態を把握するために管理栄養士が身体計測をしているところです。

を醸し出しています。飲み物も、ノンアルコールビール、ウーロン茶、コーヒー、紅茶のチョイスができ「病院食とは思えない」と絶賛されています。栄養管理室は、この他にも、褥瘡回診やNST回診、栄養指導、栄養管理計画などを通して、病棟業務へもどんどん進出しチーム医療の一員として活動しています。昔から『医食同源』と言われるように、栄養状態の改善は病気の治癒力をアップし、患者様のQOLの改善と早期退院を可能にします。

安全・満足・美味の三拍子揃った食事と食に関する適切な情報提供をめざし、これからもどんどん進化していきますよ!乞うご期待!



試食会  
新しいメニューを始める時に試食会を行いました。



# わが病院の光るワザ

当院の  
ビタミン  
事務部特集

## 当院のビタミン… 病院機能を支える元気な事務部

事務部長 馬場 洋一

本号では、少数組織ながら、名実ともにビタミン的な存在を目指す事務部の「仕事」を紹介させていただきます。当院は、国立病院機構病院の機能として診療事業、臨床研究事業、教育・研修事業を行っています。一方、サービスの提供という観点から病院の業務を俯瞰しますと、医師やコ・メディカルの行う「診療サービス」、看護師の行う「看護サービス」、病院での衣・食・住環境ともいえる「生活サービス」、そしてこれら病院の機能が円滑に効率よく発揮できるような仕組みを考え実践していく、いわゆるビタミンの役割にも似た「機能サービス」の4つに大別できます。事務部は主にこの機能サービスと生活サービスの一部を担当しています。業務にあたっては、①明るい笑顔で挨拶励行、②相手の立場に立って考えよう、③指示・伝達は明確に、④関係あることはよく周知、⑤具体的に行動しよう、の5つの箇条を事務部職員心得として、より良質なサービスが提供できるよう努めているところであります。今回は多様な業務の中から、元気な事務部を代表して3名の仕事を紹介いたします。院内各部門との協調を図り、病院理念のもと、ビタミンのように微量ながら、公共財として地域の健康を支える岡山医療センターの維持・発展に、寄与していきたいと考えています。



を提供するため「花と笑顔の病院」をキャッチフレーズとして、院内各所に花や植物を配置し、心安らぐひと時を提供しています。院内表示板については、診療科ごとに大きく判りやすいアルファベットを用いて表示するとともに、視覚障害者の方のために各所に点字も用いてご案内しています。空調については、全館冷暖房設備で一年中快適に過していただけるよう、適切な温度管理のもとに運転しています。

当院では省エネ対策にも力を入れています。昨年整備したインバーター設備は、不必要な電力消費を抑え、適切なポンプの運転を可能にしました。その省エネ効果は、11月33800kw、12月39800kw、金額にして一ヶ月あたり40万円弱の節電となって現れました。設備だけではなく、職員もエコと省エネの意識は前向きで、無駄な照明、パソコン・プリンター等の節電にも積極的に取り組んでいます。このため、スタッフエリアは場所によっては、少し暗いところがありますが、ご理解とご協力をお願いします。

当院では建物本体の管理を外部委託し、設備のエキスパートが患者さまの病院環境を24時間365日、大切に見守っています。どのような緊急時にも即座的確に対応できる体制を整えておりますので御安心ください。

このように、病院環境整備は多岐にわたっています。時には工事を伴うような建物の修繕や物品の購入等手続上のルールもあり、改善にお時間をいただくこともあります。患者さまのみならず、職員の皆さまに対しても満足いただけるサービスを提供すべく、事務部門として最大限の努力をしままいります。

## 「患者さまの病院環境の充実について」

企画課 経営企画係長 植田 誠司

当院は「患者さまにやさしい病院」を目指しています。わたしが担当する、患者さまの病院環境整備についてご説明したいと思います。

当院は、玄関から入って病室、あるいは外来に到着するまで、すべてバリアフリー化した設備を整えており、身体に障害のある方にも優しい設計になっています。そして、患者さまに癒しの場所

## 「福利厚生面からのサポート」

管理課 職員班長 栗元 寛幸

当院では、約1,000人の職員が働いております。私は、その職員の福利厚生関係の仕事を担当しています。具体的な業務としては、職員の健康診断や院内外での職員研修の企画・立案・調整、院内保育所に関する業務等です。

皆様ご存じのように病院は1年365日、1日24時間交替で誰かが勤務しています。作業環境もさま

N O

W !


 当院の  
ビタミン  
事務部特集


ざまです。職員の健康管理は、病院が機能するための根本であり、定期的な健康診断を実施し、疾病の早期発見に努めなければなりません。また、インフルエンザに代表される疾病予防措置も重要です。これらの内容としては、胸部撮影、血液検査、心電図検査等の定期健康診断の他、インフルエンザや麻疹・風疹、B型肝炎ワクチン等の予防接種、ツベルクリン反応検査等があります。

次に職員研修ですが、当院では毎年のように約100人以上の新人職員が採用されます。その新人職員に対する研修や全職員を対象にした接遇研修等の企画及び実施、高度な技術を得るための専門研修参加への調整等を行っています。専門研修には各部門からの申込みも多く、日進月歩の医療技術に対する職員の高い研鑽意欲が伺えます。

また、働く女性のサポートの一環として院内保育所を設置していますが、その円滑な運営に必要な管理及び調整事務を行っています。当院は、女性職員が全体の約75%を占めており、最近には特に入園希望者が増加傾向にあります。希望に沿えないことも多く、心を痛めております。女性職員が働きやすい環境を整えるためにも、早期に保育所の拡充が望まれる現状です。

これからも、患者様にも職員にも「やさしい病院」を実現するために、事務の立場からサポートをしていきたいと思っております。

## 「診療情報の管理はお任せください」

企画課 診療情報管理士 国末 輝子

私のホームグラウンドは病歴管理室です。病院の1階の最も北側（看護学校側）に位置しておりますが、夏の暑さ・冬の寒さにもめげず元気にがん

ばっています。この室では入院カルテ（過去20年間）、外来カルテ・レントゲンフィルム・心電図（過去10年間）を保管、管理をしています。病歴管理室の主な業務の内容を紹介します。

現在、当院では1日約30～40名の方が退院されます。当院はDPC対象病院ですので、患者さま一人ひとりの電子カルテの内容を確認し、主治医（担当医）&入院係の方と連携をとりながら、DPCコードを決定しています。また月末には、診療報酬請求のため、入院患者さま全てのDPCコードの確認作業を行います。必要があれば電話のみでなく現場に出向き、顔の見える連携をとるようにしています。今、業務の中では、DPCコードの確認がほぼ半分以上を占めています。

次に、退院後返納された紙カルテを“あるべき姿”に整理・管理をしています。今後の診療や統計、研究に役立たせていくため、また、より精度の高い診療情報を適切に管理するために、診療記録から疾病病名・手術名を世界共通のコード（ICD-10・ICD-9CM）でコーディングをしています。

そして、入院カルテ・レントゲンフィルム・心電図の貸出です。診療、研究のため依頼があった場合、できるだけ早く現場に届くように対応しています。（回収も大変です…）

以上が、病歴管理室の主な業務です。地味な仕事を毎日コツコツとしていますが、病歴管理室の中にいるメンバーはいつも元気に明るく働いています。そして、少しでも当院のビタミン的な存在に近づけたら…と日々がんばっています。

※DPC…診断に基づいた傷病名と診療行為の組み合わせ

DPCコード…14桁で構成される診断群分類番号（1572分類）

# 私たちは進化しつづけます

## がんを体験して [4回連載]\_part4

6A病棟入院 松浦 洋子

人間というものは本当に不思議です。半年間の抗がん剤投与期間が終ると同時に肉体的苦痛が精神的苦痛へと転換してしまいました。肉体的苦痛に隠れていたものが出てきました。一番は、再発への不安です。ちょっとした心のゆとりがあだとなってしまいました。自分の体力回復の現実のペースと、自分のイメージする回復ペースの不一致も自信も失わせました。それから身体を動かした後の疲労感も、元気な頃の疲労感が違うということも認識不足でした。自分自身の回復プログラムが、自分にまったくあっていなかったのだと思います。ある時は、自分の体に厳し過ぎたり、ある時はやさし過ぎたのかもしれない。その混乱が自分は、本当に回復しているのだろうかと不安につながってしまいました。また、反省が過ぎてしまって、何故がんになってしまったのだろうか、自分は早く気がつかなかったのだろうか。どこか、自分の体がサインを出していたのに、キャッチできなかったのだろうかと自分を責める気持ちが出てきました。自分自身の微妙な体調変化に過剰に反応してしまい、再発の不安に必要以上にとらわれてしまいました。もう少しゆとりを持って社会復帰を考えるべきでした。

そんな時、中西先生が冷静な判断をしてくださいました。

私はカウンセリングを受けることになりました。人生の折り返し地点のような年齢でとても良かったと思います。病気とは別に自分を振り返ることもできました。「本当のやさしさとは、感情移入することではなく、冷静な判断をすること」このことに出会い、私はとても救われました。自分自身に対してもあまりにも冷静さがなくなっていました。これは病気だけではなく私の



これからの人生にとっても役立つと思っています。

抗がん剤投与の為通院していた頃、しかも肉体的に一番厳しかった頃、投与の処置の部屋の前で順番を待っていた時、見知らぬ女性が声をかけてきました。私の容姿を見ていろいろと思われたのでしょうか。私には何も聞かずに自分のことを語られました。がんの闘病から十年経過している方でした。私よりもっと厳しいがんで厳しい闘病されたとのこと。「がんばろうとしないでね」「術後二年は、じつとがまんしてね」今改めて、「ありがとうございます」と心から言えます。ただその時はお礼を言う気力も体力も持ち合わせていなかったのが本当に残念です。

今年の六月で術後二年になります。

考えてみれば、私はとても恵まれています。

血栓のできやすい体質がわかり服薬コントロールすることができています。一家を背負う働き手の大黒柱でもありません。また保険適用範囲の治療費も支払うことができます。子どもたちも自分で考え行動できる年齢に達していて、オムツを換えたり衣服の着脱に母の手を必要とすることもありません。それどころか色々語り合えることができます。

きちんと定期検診を守り、自分の健康に向き合っていくと思っています。日進月歩の医学、がんの治療が後に向いていないのが、安心です。もう少し落ち着いてきたら、無理のない範囲で、温泉の旅に家族で出かけようと思っています。(おわり)

## 私の趣味

## 「人馬一体」

歯科 角南 次郎

10年くらい前から倉敷市内の乗馬クラブに通っています。乗馬を始めた頃は半年くらい続ければ駆け足くらいはできるようになるだろうと思っていたのですが、これがなかなか難しいものです。

現在、障害飛越という種目を練習しています。障害飛越は障害物を飛び越えるわけですが、スピードが出ているとバランスをくずして落馬しそうになります。かといって、ゆっくり走らせていると馬が障害物を飛び越すのをやめてしまいます。ここが難しいところで、もう何年も練習しているのですがずっと初心者クラスのままです。

乗馬の魅力は、自由に動いてくれない馬という乗り物を、文字通り人馬一体となって乗りこなすところにあります。特に駆け足をしているときの爽快感は何とも言えません。



●ウィーン大学医学部訪問記

# 感染制御の父ゼンメルワイス紀行

感染管理認定看護師 形山 優子

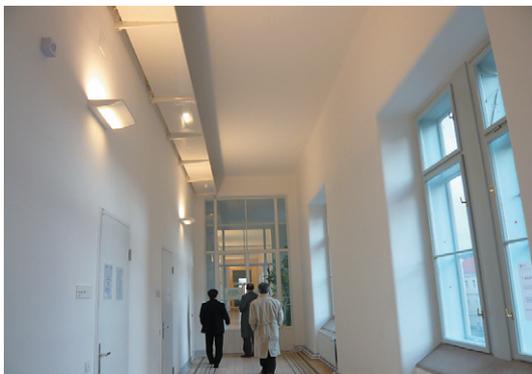
日本の感染対策は米国を参考にして目覚ましい発展をしてきました。しかし、米国と西欧諸国のMRSAの検出率を比較しますと西欧諸国はかなり低いのが実情です。一度、西欧諸国の感染対策の実際について学びたいと考えていたところ、今回、ウィーン大学附属病院の見学の機会を得ることができました。ウィーンは北海道よりも北に位置しているため、訪れた時期が11月中頃ということもあって、紅葉はすでに終わりを迎え、街はクリスマスを祝う準備に取り掛かっていました。今回、感染制御医師アサディアン先生から教えていただいた中で印象に残ったゼンメルワイスについて紹介したいと思います。

ウィーン大学医学部の歴史はあの有名な女帝マリア・テレジアの時代に始まりました。精神分析で有名なフロイトや胃の手術法を考案したビルロートが教鞭をとった病院でもあります。また、感染対策の面においては、感染制御の父と呼ばれるゼンメルワイスを輩出した伝統と実績のある国立大学病院です。

1846年頃、ウィーン大学で産婦人科の助手をしていたゼンメルワイスは、第1産科病棟と第2産科病棟では、産褥熱が生じる割合に差があることに気づきました。当時、産褥熱による死亡率は、第1病棟は13%、第2病棟では2%弱であったそうです。特徴的なことは、第1病棟

は医師が、第2病棟は助産師が診察をしていたことでした。ある日のこと、ゼンメルワイスの親友の医師が解剖中にメスで手を傷つけるというアクシデントがあり、彼はほどなく、産褥熱で亡くなった患者と同じ症状で亡くなったのだそうです。これを見たゼンメルワイスは、同じことが患者に生じているのではないかと考えました。つまり、産褥熱は解剖に携わった学生や医師の手を介して起きていたことに気がついたのです。当時の医師の手は「神の手」であり、「汚れていることなど有り得ない」時代でした。そこで、第1病棟の医師がさらし粉溶液で手を洗うようにしたところ、産褥熱の発生は、第2産科病棟と同じ程度に減少したのです。ゼンメルワイスは、医療処置を行なうには消毒剤入りの手洗いを実施することが、感染率を低下させるということの世界ではじめて説いた医師でした。しかし、当時は受け入れられず、このことが原因で失職してしまいました。

このゼンメルワイスの発見から約1世紀半が過ぎようとしています。手洗いが感染対策の基本であることは、今や医療現場での常識となっています。ウィーン大学構内のゼンメルワイスの銅像前でその偉業に感服すると同時に、つい疎かになりやすい手洗いを基本どおりに実行し、この偉人の教えを守っていこうと、あらためて心に誓いました。



当時の病棟。現在は学生の教室



アサディアン先生とゼンメルワイスの銅像の前で

# [病院活動案内]

## 地域医療研修室 セミナー・講演会(4月～5月) 会場/当院4階大研修室 時間/19:30～20:30

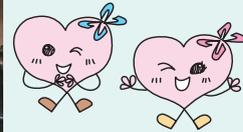
日 程	種 別		演 者
4月14日(火)	第27回薬剤師研修会	パーキンソン病の診療	当院神経内科 大森 信彦
4月21日(火)	第88回初期治療セミナー	失神と循環器疾患(仮題)	当院循環器科 宮地 昇平
5月19日(火)	第89回初期治療セミナー	脂質代謝異常症の診療	当院代謝内科 利根 淳仁

### ●クリスマスコンサート● 看護師長 三好 淳子

12月19日(金)1階玄関ホールにおいて、岡山フィルハーモニック管弦楽団の皆さんによるクリスマスコンサートが開催されました。

18時30分、日が沈むとあたりは真っ暗になりました。病院自慢の特大クリスマスツリーがライトアップされ、バイオリン・チェロなどの優雅な音色と共に澄んだ歌声がホール全体に広がりました。そして「ジングルベル」「きよしこの夜」「恋人はサンタクロース」など10数曲が演奏されました。目を閉じて聞いている人、音楽に合わせてリズムを取っている人、玄関ホールだけでなく、2階テラスには70人以上の患者様や家族・職員の方が詰めかけ、一足早いクリスマスプレゼントを心ゆくまで楽しんでいました。

参加者の中には、この日クリスマスの楽しい夢を観た人もいたのではないのでしょうか。岡山フィルハーモニック管弦楽団の皆さん、ぜひまた素敵な演奏と歌を聴かせてください。ありがとうございました。



## 当院が小児科専門医研修支援施設ならびに小児肥満症専門病院に認定されました! 小児科医長 久保 俊英



当院小児科は今まで小児科専門医研修施設として専門医の養成を行ってまいりましたが、このたび日本小児科学会から研修支援施設の認定を受け、今後は中四国地方の他の研修施設の医師の研修も受け入れることになり、今まで以上に広く小児科医の養成に携わることになりました。また、県下では初、中国地方では鳥取大学に次いで日本肥満学会から小児肥満の専門病院の認定を受けました。今後とも小児医療の基幹病院としてこども達の健康のために頑張ってまいります。

### 編集者から ●あとかぎ

新年になり、小寒、大寒、立春、啓蟄…と季節もかわり、アメリカではオバマ大統領の政権となり「Yes We Can!」と声高らかに新旋風がおきています。当院の今年の目標は「楽しく働く!」です。個々人が自分の目標を持ち、やりがいをもって働く。楽しいとは決して「らく楽らく」なことではなく、努力や積み

重ねや苦労が見え隠れすることなのだと思います。新年度に向けてどんな夢や目標を掲げましょうか!きっと私達も「Yes We Can!」と不思議な魔法をかけられる日々になりそうですね。

(鈴木 記)

## ザ・ジャーナル!!

第3巻 第4号

平成21年2月25日発行(年4回発行)  
編集責任者 大森信彦  
独立行政法人 国立病院機構  
岡山医療センター 地域医療連携室  
広報誌編集チーム  
〒701-1192 岡山市田益1711-1  
Tel.086-294-9911 Fax.086-294-9255  
印刷:山陽印刷株式会社